

阿含經典中に散在する器世間關係の資料整理 (三)

牧 達 玄

今回は四河説五河説を巡る二三の問題点を指適してみたい。まず Gaṅgā, Sindhu, Vaksā (Oxus), Sīta (Turim) の諸河を示す四河説であるがこれは世界構造論の中にあつて、須弥山が世界の中心であるとする世界観を更に象徴化する説であり、四方位、四川、四河、四猷という一連の意識下で取り扱われるものである。この説を採る資料には①雜阿82不放逸根本經②世記經1③大樓炭經1④起世(因本)經1⑤增一阿34—1⑥薩鉢多酥哩蹉捺野經⑦立世阿毘曇論9・10⑧西藏訳施設論世品11⑨大智度論8⑩婆沙論5⑪毘婆沙論2⑫俱舍論11(旧・8)などがある。これに対し Gaṅgā, Yamunā, Aciravati, Sarabhu, Mahi の諸河を示す五河説は四河説とは異り構造上の産物ではなく、ガンジス河を中心としたその支流の五河即ち現実的経験事実に基づく五河を示したものである。この説を採る資料には⑬雜阿44⑭同891⑮同841⑯同99⑰同阿2—7⑱同2—8⑲同8—4⑳同9—6㉑四分律36㉒法蘊足論10㉓集異門足論19㉔發智論1㉕八犍度論1㉖婆沙論5㉗毘婆沙論2㉘世記經9㉙大樓炭經12㉚SN 56-53・54, ㉛AN 45-91-102 ㉜AN VII-62 ㉝Milindapañha 4-(1)㉞などがある。

さて、現在までこれら兩説は相対立する説であるとされ、またそ

こに部派意識の問題を含め法藏部→四河説のみ、有部→五河説のみを採るとする意見もある。しかし、各資料を検討してみるとそのように断定できない点が存在する。次にその諸例を挙げる。まず、先に示した資料の中①であるが、これは有部に属するとされながら「譬如閼浮提一切河。四、大河、為第一。謂恒河、新頭搏、叉司陀、」と明確に四河の名を示す。また、六足論の一であり有部の初期の論書である⑧西藏訳施設論世品11にも Gaṅgā Sindhu, Sīta, Pakhu と四河の名を示す。つまり、これらの例から考えると有部は五河説のみであり四河説を知り得なかったとする説には疑問が生じるのである。また逆に、四河説のみを採るとされて来た長阿世記經類も厳密に資料を読むと五河の名称を記すことが解る。即ち㉞↓「此諸大水恒河・耶婆那河・婆羅河・阿夷羅婆提河・阿摩佉河・辛陀河・故舍河。皆悉乾竭無有遺余。」㉞↓「諸有大河江流。邪遠・阿夷・趣・摩醯。和叉・信他流江。皆枯尽無有余也。」と。この記事を見る限り、四河説→法藏部系の所産とする考えにも問題が生じる。このように四河説五河説をその名称のみで捉え、それを部派意識の下に置くことは早計の感がある。ただ、南伝上座系の資料には五河説のみが説かれ、四河説は全く見い出せないから、四河説が何等かの意味で五河説より新しい説であるとみることが可能である。そしてそれは、南伝上座系の資料に世界構造論(所謂須弥山説)を大系的に説くものがない点と関連付けて考慮すべき問題であらう。

ところで、五河説を採る資料には、また次のような問題点が存在する。まず、㉞であるが、確かにそれらは五河の名を示すが、更に厳密にいうと、それは辛陀(信他)≡Sindhu 故舍(和叉)≡Vaksā の二河を含めた七河であることが知られる。(また参考までに㉞

Mitindapāṭhā に *Gaṅgā* 以下 *Sarasvatī* まじ同様の七河の名を記す。このように²⁸で七河を示すことは、次の二つの点を提起せしめる。即ち、第一は、それがインド古来の説であり、リグベータ等で述べられる七聖河説を想起させる点である。リグベータで説かれる七河 *Sapta Sindhava* という表現について、現在までの研究では、それは *Jalam, Chenab, Ravi, Beas, Satlaj* の所謂パンジヤブの五河と *Sindu, Sarasvatī (or Vaksā = Oxus)* の計七河が当たると考えられている。今この説と先の²⁸²⁹の説を照合してみると前半の五河の名称がそっくり入れ替わっていることが解る。即ち、仏教の場合にはパンジヤブの五河ではなく五河説の五河、つまり先に示したガンジス河を中心とするその流域の五河を意識的に示した説であることが解る。この意味で仏教の説く五河説は七河説との関係において捉えられるべきものであると思われるが、同様の立場から注目すべき資料に¹³¹⁴の二経がある。これら両経は共に五大河という表現を用いず、次のように記す。即ち「如是・薩羅多吒迦・恒伽・耶符那・薩羅遊・伊羅跋提・摩醯」と実際に六河の名を示すのである。この中、薩羅多吒迦について、大正藏の下註では、*ṣaṭ-s* 本に見られる *Seyathidam* ? (それはこの如し) という語の音訳とみているが、¹³¹⁴共その前に、如是とあるからその解釈は問題とならない。赤沼博士は『印度仏教固有名詞辞典』の中で、これを二河の名称と見做しておられるが残念なことに詳しい説明がない。そこで、もしこの語が先に示した *Sarasvatī* を音訳したものであると解せれば、²⁸²⁹の先駆的なものとして非常に興味のある資料といえる。

第二の点は、²⁸²⁹で七河を述べる個所が、三災品、即ち世界の成阿含經典中に散在する器世間関係の資料整理 (三) (牧)

敗に関する内容を持つものである点である。というのは、これに相当するとみられる他の資料には次の如き重要な相違点を見出し得るからである。例えば¹⁸²¹³²は五河説を出し、⁵⁶⁷⁸は四河説を、それに²⁸²⁹ (参考³³) は七河説を探る。このように同内容を説く資料が夫々異った見解を示す点は、先に示した部派意識の問題と同時に各資料が編纂された地域的要素を充分に考慮すべきである問題と思われる。特に²⁸²⁹が、世界構造論を展開する個所では四河説を探るにも拘らず、世界の成敗を論じる部分で七河説を示す点は、仏教徒がガンジス流域だけでなく *Sarasvatī* や *Vaksā (Oxus)* を再度その意識の中に止めねばならなかった範囲 (例えばカシミールやガンダーラ) にまで仏教が伝播した後の産物と考えねばならない。また、この問題を考える場合、四河五河の両説を示す¹⁰¹¹が「五河説は東方の説である」とする見解を見落してはならないであろう。以上 (未完)

- 1 「インド仏教文化の研究」春日井真也著301頁等。2 大正2・二二三b。3 北京版64上・デリゲ版54上。4 大正1・一三七c。5 大正1・三〇三e。6 *Mil 4-(1) Pathama-vagga 4, 7 Rig-V II-12-3, 同 X-75-4, ∞ D. C. SIRCAR, Cosmography and Geography in Early Indian Literature, 1967, Calcutta, pp. 14-15* 等。9 大正2・一一三c。10 大正2・二二四b。11 同書、478頁の図表。12 大正27・二二一～二二a、大正28・一四c。

(京都文教短期大学講師)